

研究主題 「生活言語から学習言語への移行の指導に関する研究 - 言語活動の要素に着目したろう学校小学部における国語科入門期の指導の工夫 - 」

東京都教職員研修センター 研修部現職研修課
 東京都立大塚ろう学校 教諭 長谷川 恵

研究のねらい

ろう学校小学部では、当該学年の各教科、特に国語科の学習が困難な場合がある。聴覚障害児は、音や音声言語による情報を受け取りにくいことから、結果として言語発達が遅れる場合が多く、小学部に入学する段階で教科学習を十分に展開できる言語発達の段階（生活言語を拡充し学習言語への移行が始まる段階）に達していないことが学習の遅れの一つの要因になると考えられる。盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領では、ろう学校小学部の各教科の指導について、「言語概念の形成と思考力の育成」や「言葉による意思の相互伝達」に配慮するよう示している。したがって、ろう学校の国語科の指導においては、体験的な活動ややりとりを通して内容を理解しながら、言葉を正しく理解したり表現したりする力、言葉で考える力、文章を正確に読んだり書いたりする力を育成することが大切であると考えられる。

生活言語の拡充や学習言語への移行をねらいとした指導については、自立活動のコミュニケーションの区分における内容の実践例は多くあるが、小学部の国語科に明確に位置付けた先行研究は少ない。

そこで、研究のねらいを、生活言語の拡充と学習言語への移行に必要とされる言語活動の要素を整理し、その要素に着目したろう学校小学部における国語科入門期の指導の工夫が有効であるかを検証することとした。

研究の内容と方法

1 研究の仮説

上記のねらいを達成するため、以下のような仮説を立て、検証することにした。

ろう学校小学部第1学年の国語科の入門期に、手話や指文字等を活用して生活言語の拡充を図り、話し言葉を書き言葉に表し提示する工夫をすることで、学習言語への移行を促すことができるのではないかと仮説を立てた。

手話、音声言語を含めて「話し言葉」とした。

2 研究の方法

基礎研究		調査研究	実践研究	研究のまとめ
文献研究 ・国語科入門期の目標と内容 ・言語発達 ・先行研究	生活言語と学習言語の定義 言語活動の要素の整理	小学部入学当初の児童の実態把握 国語科入門期の指導内容と課題の把握	対象児童の実態把握 手だての検討 検証授業の実施	指導の工夫の有効性の検証 研究の成果と課題

研究の結果と考察

1 基礎研究

(1) 本研究における「生活言語」と「学習言語」を以下のように定義した。

生活言語	具体的な場面や自分の行動を中心とした内容について一対一や小集団でのやりとりの中で言語化していく言語活動である。話し言葉が中心である。
学習言語	時間的、空間的にも拡がりがあり、具体的な場面や行動を離れた内容について、不特定多数の相手に対してある程度筋道を立てて言語化していく言語活動である。話し言葉だけでなく、書き言葉も含まれる。

斎藤佐和(1986)「聴覚障害児童の言語活動」、岡本夏木(1985)「ことばと発達」を参考に作成した。

(2) 国語科入門期を、「文章の読解を中心とする学習活動に入るまで」と定義し、それまでに育てたい児童の言語活動の要素を表1に整理した。

さらに、ろう学校における国語科入門期の目標を表2のように設定した。

表2 ろう学校小学部国語科入門期の目標

領域	目標
話す	三語程度の文の形で話す。 文をいくつか続けて詳しく話す。 順序に従って話す。
聞く	時間的・空間的に離れた内容が分かる。 「～のとき」「～したら」「～だから」などのつなぎの言葉が分かる。
読む	二～三語文が読んで分かる。 (「～が…。」「～が～を…。」「～が～に…。」)
書く 言語事項	平仮名で単語を書く。 指文字を見て、平仮名を正しく書く。

表1 国語科入門期までに育てたい言語活動の要素(一部)

段階	生活言語の拡充と学習言語への移行の始まり
対象	友達と一対一、あるいは小集団 状況を共有していない人
形式	双方向の対話 一方向の自己設計
状況	現在・過去・未来の具体的場面 想像した場面、空想の場面
内容	具体的場面の詳しい状況、行動、経験 具体的場面を離れた経験 (過去、未来、見たこと、知っていること) 身近な人の具体的経験(未経験の内容) 物語的な内容 説明的な内容
言語の状態	話を聞いて内容をイメージする。 文をいくつか続けて場面の様子を詳しく話す。 出来事の順序に従って話す。 出来事に伴う感情や印象を表現する。 話題から逸れないで話を続ける。 言葉について意識し、言葉遊びをする。 言葉の意味を状況ではなく文脈からも理解する。 言葉による言葉の説明を理解する。 言葉の意味を尋ねたり、簡単な意味の説明をしたりする。 「～ので」「でも、～」「～とき」など、つなく言葉を使って話す。
文字	平仮名を見て音声や指文字で表す。 平仮名で書かれたものの意味を理解する。

齋藤佐和(1986)「聴覚障害児童の言語活動」、岡本夏木(1985)「ことばと発達」を参考に作成した。

2 調査研究

(1) 「ろう学校小学部における国語科入門期の指導に関する実態調査」を実施した。

目的:ア 小学部普通学級入学当初における児童の言語活動の実態を把握する。 イ 第1学年の国語科入門期の指導内容と課題を明らかにする。
対象:小学部第1学年普通学級を担当した経験のある教員(今年度の担任も含む)。 都立ろう学校6校25名から回答。
方法:質問紙法(選択、記述)
時期:平成17年7月～8月

(2) 結果と考察

小学部普通学級入学当初の児童(国語科の指導で特に配慮が必要な児童)の言語活動の実態回答した教員の70%以上が、「文をいくつか続けて話す」「出来事の順序に従って話す」などの言語活動について十分に獲得していないと評価した。したがって、小学部においても教科学習の準備段階の言語活動となる生活言語の拡充や学習言語への移行をねらいとした指導を意図的に取り入れることが必要であると考えた。

また、「文字に興味をもち、文字を拾い読みする」の項目については68%の教員が、「十分できる」「おおむねできる」と評価した。このことから、国語科入門期から指導の手だてとして文字を活用することが有効であろうと考えた。

国語科入門期の指導の課題

75%以上の教員が国語科入門期の児童の実態に即した指導内容の設定に課題を感じていることが分かった。そこで、言語活動の要素に着目することが指導内容の設定に効果的ではないかと考えた。

3 実践研究(検証授業)

(1) 対象児

都立ろう学校小学部第1学年児童5名。

(2) 単元名

国語「おはなしビデオをつくろう ～おむすびころりん～」

(3) 着目した言語活動の要素と指導の工夫

着目した言語活動の要素	対象	小集団 状況を共有していない人(ビデオを見る人)
	内容	物語的な内容
	言語の状態	文をいくつか続けて話す。 出来事の順序に従って話す。
	文字	平仮名で書かれた単語の意味を理解する。

指導の工夫	手話や指文字等の活用	手話等を活用して読み聞かせする。 手話等を活用してやりとりをする。 指文字で単語を表す。 提示した文を読むときに指文字で助詞を表す。
	書き言葉の提示の工夫	絵や実物、動作で意味を確認したものの単語を提示する。 提示した話し言葉の文に対応した書き言葉を提示する。 場面ごとに物語の順序に従って文を並べて提示しておく。

(4) 単元設定の理由

「おむすびころりん」は、おじいさんの行動を中心に物語が展開していくので、主語と述語の関係が分かりやすく、文の理解や表出が容易であると考えた。また、おじいさんの行動を動作化し、それを言語化することで順序に従って話す活動を促しやすいと考えた。その上で、児童が話す目的をもつために「おはなしビデオ」作りに取り組む設定をした。

(5) 検証授業の経過と結果

対象児を実態把握から3群に分け、個別の目標と手だてを設定して検証授業を行った。

		A児・B児	C児・D児	E児
児童の実態		・二、三語文の発話が見られる。 ・経験したことについて2～3つの文を続けて話す様子が見られる。 ・簡単な文を見て、文字を単語のまとまりで拾い読みができる。	・二語文程度の発話が見られる。 ・一つの事柄について対話を続けることができる。 ・文字で表した単語の意味がいくつか分かる。	・身振りや一語文(単語)での発話を中心である。 ・一対一の対話ができるようになってきている。 ・文字で表した単語の意味がいくつか分かる。
個別の目標 学習の経過		・文をいくつか続けて話す。 ・内容を順序に従って話す。	・文の形で話す。 ・内容を順序に従って話す。	・手話での話を理解する。 ・動作を言語化する。
第一次 1時間	ねらい 絵を見て話の内容を自分なりの表現で伝える。	【主な手だて】 一文で終わらないように「それから?」と話を促す。	【主な手だて】 絵やペープサートを提示する。	【主な手だて】 絵やペープサートを提示する。 動作の一部を提示する。
	活動内容 挿絵を見て自由に話す。	【結果】 覚えている場面について動作を交えながら、二、三語文で話す様子が見られた。教師の問いかけに対して場所や動作などを単語で話す様子が見られた。	【結果】 動作や単語で場面の一部を表現していた。また、覚えている場面の一部を単語や二語文で話す様子が見られた。	【結果】 動作を交えながら、おむすびが転がって、穴に落ちる様子や穴から音楽が聞こえる様子を表現した。
第二次 4時間	ねらい 手話や音声等で話されたことを理解する。	【主な手だて】 手話を活用して読み聞かせをする。 一動作ごとに文字で文を提示する。	【主な手だて】 手話を活用して読み聞かせをする。 手話を活用して文の表現を提示する。	【主な手だて】 手話を活用して読み聞かせをする。 手話や動作、小道具を活用して一動作ごとに意味を確認する。
	活動内容 一場面ずつの読み聞かせを見た後、やりとりや動作化する。	【結果】 場面ごとに物語の流れに沿って動作で表現した。動作ごとに三語文程度で話す様子が見られた。	【結果】 場面ごとに物語の流れに沿って動作で表現した。一動作ごとに二語文程度で話す様子が見られた。	【結果】 場面ごとに物語の流れを動作で表現した。一動作ごとに三語連鎖程度で話す様子が見られた。
第三次 5時間	ねらい 理解した内容を話し言葉や動作で伝える。	【主な手だて】 場面ごとに順序に従って文を提示し、話す活動を促す。	【主な手だて】 場面ごとに文を提示する。 一動作ごとに手話等の話し言葉と文字の文を結び付ける。	【主な手だて】 一場面から四場面まで通して動作で表現するよう促す。 手話を提示し模倣を促す。
	活動内容 場面ごとにナレーターや劇の練習をして、おはなしビデオを撮る。	【結果】 担当した場面について提示された文を手話や音声、指文字等で読みながら、場面の順序に従って話す様子が見られた。	【結果】 担当した場面について提示された文中の既知の単語を手掛かりに文の内容を覚え、順序に従って話す様子が見られた。	【結果】 一場面から四場面までのおじいさんの行動を順序に従って動作で表現した。部分的に手話で単語や二語文で話す様子が見られた。

手話、音声言語での表現を含めて「発話」「話す」「話し言葉」とした。

(6) 考察

手話や指文字等を活用した生活言語の拡充

手話等を活用した読み聞かせや、物語の内容についてのやりとりは、絵や実物、動作を言語化する、文の形で話すなど生活言語の拡充を図るために有効であると考えられる。

また、指文字の活用が、単語の習得を図り、書き言葉の理解や表出へつながっていくために有効であると考えられる。しかし、提示文を読む際に、助詞を指文字で表して読んだところ、話す際に表現が混乱した児童がいた。文の形で話すことを目標とする段階の児童には文で話す力が、ある程度育ってから助詞の指導に入った方がよいと考えられる。

話し言葉を書き言葉に表し提示する工夫

ア 単語の提示

絵や動作を通して理解した事柄について書き言葉で提示した単語が、児童が話す際の手掛かりとなり、児童の言語での表出を促すために有効であると考えられる。

また、児童が理解した話し言葉を文章で提示された際に、文中の既知の単語を手掛かりとして、文をまとめりとらえて内容を把握できるという効果があると考えられる。

イ 主語と述語を明示した文の提示

話し言葉、書き言葉ともに、主語と述語を省略せずに文を提示することは、二～三語文の表出や理解を促すために有効であると考えられる。一文で内容が成立する文は、文をいくつか続けて話したり読んだりするのが難しい段階の児童にとっては、内容の確実な理解や表出のための有効な手だてになると考えられる。また、話すための手掛かりとして話の流れに沿って文を並べるなど、提示の仕方を工夫することが、順序を意識していくつか文を続けて話すなど、学習言語につながる話す力を育てるために有効であると考えられる。

言語活動の要素に着目した単元設定

ア 全員が内容を共有できる題材の設定

国語科入門期において物語を扱う際、既知の物語を題材にすることは、全員が内容を共有して学習を進めることができ、一斉指導において言葉での円滑なやりとりを促すために有効な手だてであると考えられる。そして、一語文や動作で表現する段階の児童には動作の言語化を図る、二語文程度の発話の段階の児童には文の形で話す、文を続けて話す、順序に従って話すなど、生活言語の習得や拡充、学習言語への移行を促すために有効ではないかと考えられる。

イ 「出来事の順序に従って話す」ための教材・教具の工夫

絵のほかに動作化やペープサート等を活用することは、登場人物の行動の流れを理解しやすくなり、出来事の順序に従って話す力を育てるために有効であると考えられる。

ウ 対象を意識した話す活動の設定

学習言語へ移行していくためには、状況を共有していない人に話を伝える力が必要である。児童の実態に即して段階的に言語活動の対象を設定することが、生活言語から学習言語への移行を促すことについて有効ではないかと考えられる。

まとめと今後の課題

国語科においても言語活動の要素に着目することで、児童の実態に即したねらいや手だてを設定し、効果的に言語活動を育てることができると考える。その中で、手話等の活用や、文字で単語や文の提示する工夫をして指導することが、生活言語の拡充に有効な手だてであることが今回の研究で検証できた。今回の研究では、学習言語へ完全に移行する段階まで検証するには至らなかったが、話す力を育て学習言語の習得につなげていくための手だてとして、話し言葉を書き言葉に表し、文のモデルを提示することの効果を実感することができた。

今後の課題としては、様々な言語活動の要素に焦点を当てた指導事例を積み重ねること、児童の実態に応じた指導の工夫についてさらに検討すること、入門期以降についても言語活動の要素を整理し学習言語への移行のための国語科の指導の工夫を検討することなどが挙げられる。